The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ヴェーダの「香」
Author(s)	大島, 智靖
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 2017, 51, p. 19-35
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71385
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ヴェーダの「香」

大島　智靖

キーワード：ヴェーダ／香／gandha／神話／祭式

1　はじめに

現在、香りを用いた供養には線香、抹香などが知られ、仏教、ヒンドゥイズムをはじめインド諸宗教の儀礼においては一般的である。しかし、その源流とも見なされるヴェーダ、特にシュラウタ文献に記される儀礼の中にそのような「香」が登場することは少なく、その具体像は把握し難い。そこで本稿は、シュラウタ文献における「香り」を巡る記述を調査し、神話・象徴的な「香り」から祭式のアイテムとして具体像が多少なりとも表れている「香」まで、様々な香りの宗教的意味について検討してみたい。

2　ヴェーダにおける原初の香ー*gandhá-*

ヴェーダ文献において「香り・匂い・臭い」を意味する語の筆頭は*gandhá-*である。芳香・悪臭ともに意味する。[1)]

2.1　Gandharva と香り

*gandhá-*をその名に持つ妖精Gandharvaと関連した言及は少なくない。次の詩節はヴィラージ讃歌集AVŚ VIII 10の一節である。[2)]

AVŚ VIII 10,27: *sód akrāmat. sā́ gandharvāpsarása ā́gachat. tā́ṃ gandharvāpsarása úpāhvayanta púṇyagandha éhī́ti.* | *tásyāś citrárathaḥ*

sauryavarcasó vatsá ā́sīt puṣkaraparṇáṃ pā́tram. | *tā́ṃ vásuruciḥ sauryavarcasó 'dhok. tā́ṃ púṇyam evá gandhám adhok.* | *tā́ṃ púṇyam gandháṃ gandharvāpsarása úpa jīvanti. púṇyagandhir upajīvanī́yo bhavati yá evā́ṃ véda.*||

彼女（ヴィラージ）は歩み出た。彼女はGandharvaたちとApsarasたちのもとにやって来た。GandharvaたちとApsarasたちは彼女に呼び掛けた、「善き（*púṇya-*）香りを持つ者よ、来い」と。彼女にとって、Sūryavarcas‘太陽の効力を持つ者’の息子Citraratha‘色とりどりの戦車を持つ者’が仔牛であり、蓮華が器［であった］。[3)]

彼女をSūryavarcasの息子Vasuruci‘素晴らしい嗜好を持つ者’が搾乳した。彼女を［搾乳して］他ならぬ善き香りを搾乳した。

GandharvaたちとApsarasたちは善き香りを糧としている。このように知る者は、善き香りを持つ者、糧として頼られる者になる。

Gandharvaと水の妖精Apsarasが、香りを生きる糧としていることを伝える因縁譚である。ヴィラージ以外の登場人物は、後代の文献に拠る限り、いずれもGandharvaの一員とされる。ヴィラージ（*virā́j-*）は世界創造に関わる女性原理であるが、この讃歌集では様々な形を取り、神々や人間たちに多様な生活の糧を齎す存在となっている。この詩節では芳香を持つ女（牝牛）として登場する。*púṇya-*と呼ばれるということは、清らかで福徳をもたらす縁起の良い牛乳の香りとも解せる。以下のようにMSにおいても*púṇya-*が言及される。

MS IV 2,13:36,13: *átha gandharvāpsaráso 'duhra puṣkaraparṇéna púṇyaṃ gandhám. duhé púṇyaṃ gandhā́ṁ yá evā́ṁ véda.*

GandharvaたちとApsarasたちは蓮華によって善い香りを搾り出していた。このように知る者は善い香りを搾り出す。

ここでも動詞duh「乳搾る」を使用しており、蓮華の香りと搾乳が関連付けられている。続いてAVŚより、大地の讃歌集の一節である。

AVŚ XII 1,23—25: *yás te gandháḥ pṛthivi saṃbabhū´va. yáṃ bíbhraty óṣadhayo yám ā́paḥ | yáṃ gandharvā́ apsarásaś ca bhejiré téna mā surabhíṃ kṛṇu. mā́ no dvikṣata káś caná* ||23||
yás te gandháḥ púṣkaram āvivéśa yáṃ saṃjabhrúḥ sūryā́yā vivāhé | ámartyāḥ pṛthivi gandhám ágre téna mā surabhíṃ kṛṇu. mā́ no dvikṣata káś caná ||24||
yás te gandháḥ púruṣeṣu strīṣú puṃsú bhágo rúciḥ | yó áśveṣu vīréṣu yó mṛgéṣūtá hastíṣu | kanyā̀yāṃ várco yád bhūme ténāsmā́ṁ ápi sáṃ sṛja. mā́no dvikṣata káś caná ||25||

（23）君の香りであるものが、大地よ、発生した。草たちが保持するもの、水たちが保持するもの、GandharvaたちとApsarasたちが共有したもの、それによって私を香り良きもの（*surabhí-*）と君は為せ。誰ひとり我々を憎むことがないように。

（24）君の香りとして蓮華へと入ったところの、Sūryāの結婚において不死なる者たちが、大地よ、太初に集めた香り、それによって私を香り良きもの（*surabhí-*）と君は為せ。誰ひとり我々を憎むことがないように。

（25）君の香り、［すなわち］人間たち、女たち、男たちの中にある分け前であり、喜びであるところの、馬たち、勇者たちの中に［ある］、獣たち、そして象たちの中に［ある］、少女の中の輝きであるところの、大地よ、そういう［君の香り］と、我々を統合せよ。誰ひとり我々を憎むことがないように。

太初の香りは大地から生まれた。神話的な記述であるが、香りの原点として草花のものが第一と見なされていた。植物の基礎である土と水が香りの根源である。（24）では蓮華と結び付けられているが、花・葉ともに蓮華は儀

礼において多用されるため、儀礼における香りの要素として重要視されていたと考えられる。これらの讃歌集はKauśS V 2,12; 16（=XXXVIII 12; 16）他においていわゆる地鎮祭（*bhauma-*）に用いられるようである。[4)]

2.2　悪臭（内臓臭・獣臭）としての匂い

次に、悪臭・内臓臭としての*gandhá-*を検討してみたい。

ṚV I 162,10: *yád ū́vadhyam udárasyāpavā́ti yá āmásya kravíṣo gandhó ásti* |
sukṛtā́ tác chamitā́raḥ kṛṇvantūtá médhaṃ śṛtapā́kam pacantu ||
腹[5)]の胃内容物が発散するもの、未調理の生肉の匂いであるもの、
そのとき［それに対して］屠殺人たちは巧みな仕事を為せ、[6)]そして彼らは供儀［馬］を完全に調理せよ。

ここでは馬の犠牲祭（Aśvamedha）を背景として、神々に捧げるために屠殺した馬の臓物臭を忌避し、解体を担当する者たちが適切な処理によって神々に相応しい供物へと変えている。

また以下の詩節は、魔物から妊婦を護る呪詛として伝えられているものである。

AVŚ VIII 6,12: *yé sū́ryaṃ ná títikṣanta ātápantam amúṃ diváḥ* |
arā́yān bastavāsíno durgándhīṃl lóhitāsyān mákakān nāśayāmasi ||
天から燃えさかるあの太陽を堪えようともしない、
山羊［臭］をまとった[7)]悪臭放つ赤い口の魔物たち、マカカたちを我々は追い払う。

*mákaka-*は謎の魔物であり、何ら具体的な像は得られないが、ある種の血生臭い獣がモチーフとなっている可能性もあろう。*durgándhi-*「悪臭を持つ」が獣臭さかどうかは*bastavāsín-*の解釈が関わってくるが、従来諸解釈があり

確定的ではない。

次の例は悪臭とは断定し難いが、内臓臭の一種と考えておく。

TS V 7,23: *sarpā́m̐ lohitagandhéna váyāṁsi pakvagandhéna*
蛇たちを血の匂いと共に、鳥たちを調理したものの匂いと共に…

上記はAśvamedhaにおける解体部位の神学議論の一部である（=KS[Aśv.] V 13,13）。*gandhá-*の種類として「血の匂い」が挙がっているが、蛇を象徴する匂いと捉えられていたかどうかは不明である。

2.3 ソーマと香り

ソーマと香りに関する言及も見られる。以下は、Taittirīya派において、圧搾する前のソーマに呼び掛けるマントラである。

TS I 2,6,1:[8] *aṁśúnā te aṁśúḥ pṛcyatām páruṣā párur. gandhás te kā́mam avatu. mádāya ráso ácyuto. 'mā́tyo 'si. śukrás te gráhaḥ* ||
君のソーマ茎はソーマ茎と混ざれ、節は節と。君の香りは願望[9]を駆り立てよ。精髄は酔いのために去らない。君は同居者である。君の杯は輝かしい。

ソーマの香りがいかなるものか、ここでは具体的に示されず、解釈（TS VI 1,9,3）においても言及されない。この箇所はソーマ祭における「IndraとVāyuに捧げる杯」（*aindravāyavá gráha*）の神話の一部である。その神話については、ŚBが詳しい：Vṛtraと闘ったIndraはVṛtraを本当に仕留めたか不安になり、そこで神々がVāyuにVṛtraの生死確認を依頼する。発見されたVṛtraの死体は神々によって各々奪い取られ、各杯（*gráha*）となった。すなわちVṛtraはソーマの象徴である。ところがその腐敗臭が献供や饗応に相応しく

なく、困った神々は、Vāyuに、吹き清めて美味しくするよう依頼した。そして以下のように説く。

> ŚB IV 1,3,8: *tásya devā́ḥ yāvanmātrám iva gandhasyā́pajaghnus. tám paśúṣv adadhuḥ. sá eṣá paśuṣu kuṇapagandhás. tásmāt kuṇapagandhā́n nā́pigṛhṇīta. sómasya haiṣá rā́jño gandháḥ* ||*8*||
> 神々は[10]、その［Vṛtraの］匂いの、ちょうどあらん限りの量を追い払った。彼らはそれを家畜たちに置いた。そのようなこれが家畜たち（犠牲獣たち）の中の死臭である。それゆえ死臭たちに対して［鼻孔を］閉じるべきではない。これは王ソーマの匂いなのである。

ここで*gandhá-*は獣（犠牲獣）の死臭を指しているが、ソーマの象徴であるヴリトラの死臭が源であり忌避すべきではないといて、儀礼上の意義を持たせている。

また、ソーマの香りに関して、PB I 3,9の祭文では*sū́rya*→*cákṣus*、*vā́ta*→*prāṇá*、*soma*→*gandhá*、*bráhmaṇ*→*kṣatrá*という対応が見られ、香りの理想としてソーマがある。

2.4　香草

魔除けに利用される香りもまた、*gandhá-*である。

> AVŚ IV 37,2: *tváyā vayám apsaráso gandharvā́ṃs cātayāmahe* | *ájaśṛṅgy ája rákṣaḥ sárvān gandhéna nāśaya* ||
> 君[11]によってApsarasたちとGandharvaたちを退散させる、山羊の角を持つものよ、君は毀損力を駆り立てよ、一切を香りによって追い払え。

この詩節はある種の草（*óṣadhi-*）に対する呼びかけ・称讃である。歴代

の諸先師がこの草によって邪悪な毀損力を退けたとされる。「山羊の角を持つもの」と呼ばれるこの香草は、註釈段階以降ではOdina Pinnata（=Lannea Coromandelica）とされ、[12]強い香りが魔除けとして機能したと推測される。[13]

2.5 飯

また、同じくAVの供飯*odaná-*を讃える詩節に*gandhá-*の言及がある。

AVŚ XI 3,8: *trápu bhásma háritaṃ várṇaḥ púṣkaram asya gandháḥ* |
灰はスズ、色は黄緑、この［飯］の匂いは蓮華。

調理に際し、その素材と調理道具の諸々が神格や現象界・人体の構成要素と同一視され、列挙される。従ってここでの「匂い」は実際のものではなく象徴的な表現であろう。

2.6 煙と香り

煙と香りについての記述は、現代の線香そのものや塗香に繋がっていく可能性があるため注目に値する。以下のṚVにおいては煙と香りの関連が示されている。

ṚV I 162,15: *mā́ tvāgnír dhvanayīd dhūmágandhir mókhā́ bhrā́janty abhí vikta jághriḥ* | *iṣṭáṃ vītám abhígūrtaṃ váṣaṭkr̥taṃ táṃ devā́saḥ práti gr̥bhṇanty áśvam* ||
煙[14]を香りとして持つ火は、君を燻すな（aor. inj.）、白熱して沸騰している鍋（*ukhā́-*）は吹きこぼれるな（aor. inj.）。[15]諸儀式の洗礼を経て、［一年間の放浪を］追跡され、承認され、vaṣaṭの発声を為された、そういう馬を、神々は受け取る。

犠牲となる馬についての詩節である。火煙は香りを伴う（*dhūmágandhi-*）

と見なされていた。また、燻すことに関連して、「香りを付ける」という行為を意味する動詞に *dhūpa-*「香（の煙）」からの denom. である *dhūpay°*「燻す」がある。Vājasaneyin 派のみに伝わる以下のマントラには、馬糞を燻して香りを付けるという行為が見られる。すなわち、Pravargya（ソーマ祭の中で、あるいは独立で執行される秘儀）において、器を燻す場面がある。

> VS XXXVII 9: *áśvasya tvā vr̥ṣṇaḥ śaknā́ dhūpayāmi devayájane pr̥thivyā́ḥ* ||
> 雄々しい牡馬の糞（*śakar-*）によって君を、私は燻す、祭場である大地において。

糞の利用に関して、ポスト・ヴェーダ期以降牛糞が神聖視されるに至るが、ヴェーダにおいてはあまり重要な位置を占めていない。しかしこのマントラでは馬糞が神性を帯びたものとして利用されていると考えられる。また、この燻す行為は象徴的にも為され、「韻律によって燻す」という表現が Yajurveda 諸派のマントラに多く見出される。[16)]

2.7　香木・松脂（まつやに）

次は、祭火の囲み木に関する言及である。

> ŚB III 5,2,15—17: *śárīraṃ haivā̀sya pī́tudāru. tád yát páitudāravāḥ paridháyo bhávanti śárīreṇaivàinam etát sámardhayati. kr̥tsnáṃ karoti* ||15||
> *māṃsáṃ haivā̀sya gúlgulu. tád yád gúlgulu bhávati māṃsénaivàinam etát sámardhayati. kr̥tsnáṃ karoti* ||16||
> *gandhó haivā̀sya sugandhitéjanam tád yát sugandhitéjanam bhávati gandhénaivàinam etát sámardhayati kr̥tsnáṃ karoti* ||17||
> （15）マツ（*pī́tudāru*）[17)]はこの［祭火］の他ならぬ骨格である。そこでマツから成る囲み木たちが用いられるとき、当の［祭火］に他ならぬ骨格をこうして備えていることになる。完全なものにする。

（16）松脂（マツヤニ）（=*gúgglu-*, ブデリウム樹脂）[18]はこの［祭火］の他ならぬ肉である。そこで松脂が用いられるとき、当の［祭火］に他ならぬ肉をこうして備えていることになる。完全なものにする。

（17）良い香りの葦はこの［祭火］の他ならぬ香りである。そこで良い香りの葦（*sugandhitéjana*）が用いられるとき、当の［祭火］に他ならぬ香りをこうして備えていることになる。完全なものにする。

（15）（16）において直接言及はされていないが、松脂（ブデリウム樹脂）は一般に芳香樹脂であり、マツから採る囲み木（パイン材）と松脂もまた香りを放つものとして認識されていた（次例参照）。（17）の香りのよい葦（*sugandhitéjana-*）は、マツと並列されることがある。[19]

さて、Aśvamedhaにおいて用いられる祭柱には数種類の木材があるが、マツは香木として重視されていたことが以下の例よりわかる。

ŚB XIII 4,4,7: *átha yád āpomáyaṃ téja ā́sīt yó gandháḥ sá sārdháṃ samavadrútya cakṣuṣṭá údabhinat. sá eṣa vánaspátir abhavat pī́tudārus. tásmāt sá surabhír. gandhād dhí samábhavat. tásmād u jvalanás. téjaso hí samábhavat…*

次に、水から成る光熱であったもの、香りであったもの、それは一緒に［Prajāpatiの］視覚機能から流れ出して、裂け出た。そのようなこれはマツ（*pī́tudāru-*）という樹になった。それゆえ、それは良い香りを持つ。香りから発生したから。一方でそれゆえに燃えやすい。光熱から発生したから…。

このように、マツ・松脂と*gandhá-*の関係が注目される。

2.8 軟膏と香り

続いて、身体に適用する軟膏と香りの関係について、検討する。以下は

araṇyānī-‘森の女神’を讃えるṚVの詩節である（=TB II 5,5,7）。

ṚV X 146,6: *ā́ñjanagandhiṃ surabhím bahvannā́m ákṛṣīvalām* | *prā́hám mṛgā́ṇām mātáram araṇyāním aśaṃsiṣam* ||
軟膏の香りを持ち、良い香りを持ち、農耕無しでも作物豊かな、
獣たちの母を、森の女神を、私は今称讃した。

*ā́ñjana-*は、儀礼において頻繁に軟膏として用いられるが、[20] ṚV段階より、軟膏に香りの効用があることが示唆されている。*surabhí-*も香りに関連する語である。また以下は、王即位式後のSautrāmaṇīにおける「犠牲獣の脂汁（*vásā-*‘白く輝くもの’）による灌頂」の準備である。祭主は注ぎ掛けの前に何らかの香料を肢体に塗り込む。

ŚB XII 8,3,16: *sarvasurabhy ùnmárdanaṃ bhavati. paramó vā́ eṣá gandhó yát sarvasurabhy ùnmárdanaṃ. gandhénaivàinam etád abhíṣiñcati.*
あらゆる香料［を用いた］塗り込みが適用される。あらゆる香料［を用いた］塗り込みであるもの、これは、至高の香りなのだ。他ならぬ香りを伴って、このとき当の［祭主］に注ぎ掛けることになる。

いわゆる塗香の一種がここで示されている。具体的には不詳だが、[21] ナヴァニータ（*návanīta-*, →註20参照）に様々な香料を加えたとも推測できる。

さらに、ソーマ圧搾における歌詠祭官たちの合唱において、Prastotṛ補助祭官が使用する細木（*kuśā-*）[22] に何らかの香料が塗られる。

LātyŚS II 6,1: *... gandhaiḥ pralipya sarpiṣā sattreṣv eke...*
…［細木に］香料たちによって塗り付けて後、［しかし］サットラたちにおいては、熟酥によって［塗り付けると］ある者たちは［規定する］…

その詳細は不明であるが、何らかの軟膏であり、ナヴァニータをアレンジしたものかもしれない。しかしサットラ（長期間のソーマ祭）において酸乳を加熱して得られた*sarpíṣ-*（熟酥）を適用するという。*sarpiṣ-*は、さらに煮詰めて*sarpirmaṇḍa-*（醍醐）になるが、ヴェーダ文献においてその用例は少ない。パーリ仏典では比較的よく登場し、*nibbāṇa*の説明において*sappimaṇḍa-*が持つ三美徳すなわち色・香・味が挙げられ、その香りも愛されていた。[23] 乳製品の香りは、恐らくヴェーダにおいて強く意識され、このように身体や祭具に塗るという形で重要視されていたであろう。次のAVの例は、軟膏（*ā́ñjana-*）と*sarpiṣ-*の並置という点で興味深い。

AVŚ XII 2,31: *imā́ nā́rīr avidhavā́ḥ supátnīr ā́ñjanena sarpíṣā sáṃ spṛśantām* | *anaśrávo anamīvā́ḥ surátnā ā́ rohantu jánayo yónim ágre* ||
これら、寡婦ではなく良き夫を持つ女たちは、軟膏と、熟酥と触れ合え。無傷で罹患なく、良き宝飾を持つ妻たちは、最初に母胎へと登れ。

この詩節は‘*gārhapatya*（家長の火）と*kravyād agni*（肉食のアグニ）’という家長の火設置から撤去までに関する讃歌集の一節であり、原初の獰猛な火を、正しい鑽出しによって儀礼に相応しい祭火にすることが謳われる。軟膏と熟酥のセットについて、香りの直接的な言及はないが、香料としても意識されていたであろうと考えられる。また、第49詩節では「寝台（*tálpa-*）」[24] に呼び掛け、‘*jyóg evá naḥ púruṣagandhir edhi*’「まさに末永く我々にとって、人間の香り持つものであれ」と祈願する。寝台と香りについては次節のŚrauta-Sūtra文献においても言及がある（→ĀpŚS）。

3　儀礼と香料

最後に、Śrauta-Sūtra文献における*gandhá-*についていくつか検討したい。

祭式における具体像がより明確である。願望的穀物祭において、BaudhŚS後半部の註釈（*dvaidha-sūtra*）に香料*gandhá-*についての記述が見える。

> BaudhŚS XXIII 1:148,13: *sa ha smāha baudhāyanaḥ prokṣaṇīṣu ca gandhān āvapeyur gandhavantaś cartvijaḥ pracareyur iti*.
> それについてBaudhāyana師は言ったものだ、「撒き水たちの中に香料たちを撒き入れるべきである、そして祭官たちは香りを備えて所作すべきである」と。

また、家畜や人資源を失いそうな者は、祭火（ここでは*surabhimant agni*‘芳香を持つ火’と呼ばれている）に8皿分の祭餅（プローダーシャ）を献供する規定があるが、それに関連する撒き水（*prókṣaṇī-*）に何らかの香料を入れる。祭官たちは自ら塗香して（あるいは塗香した祭具を用いて）所作することを述べている。

> ĀpŚS XIV 12,9: *gandhaiḥ priyavadyena ca talpam* ||
> ［報酬を得た者は近づく、］香料たちと好ましい言辞と共に、寝台へ。
> ĀpŚS XX 21,8: *ye ’śvasya hutasya gandham ājighranti sarve te puṇyalokā bhavantīti vijñāyate* ||
> 献供された馬の香りを嗅ぎに来た者たち、彼らは全て清らかな善い世界を持つ者たちとなる、と知られる。
> ĀpŚS XXI 20,3: *tataḥ saṃvatsaragāthā. gāva eva surabhayo gāvo gulgulugandhayaḥ | gāvo ghṛtasya mātaras tā iha santu bhūyasīḥ* ||
> それから一歳の偈頌である。[25]“良い香りを持つ他ならぬ乳牛たち、松脂の香りを持つ乳牛たち、バターオイルの母たちである乳牛たち、彼女たちはこの世でもっと増えよ”

第1例目は報酬（*dakṣiṇā-*）の規定である。寝台は後代の註釈によると、女を意味するという。第2例目はAśvamedhaの文脈であるが, ここでは「献

供された」とあるので、屠殺時の死臭（2.2参照）というより、調理による芳香を意味するとも考えられる。第3例目は具体的な香料ではなく、神話的なものであるが、一年間続くソーマ祭Gavāmayana‘乳牛の歩み’における規定であり、女奴隷（*dāsya*）たちが長い偈頌を詠う。そこで言挙げされている乳牛に対する香り（*surabhi-*）は乳製品のそれが意図されていよう。さらに松脂の香りも付帯されており、乳牛に対する強い愛着が表れている。

4　おわりに

以上、ヴェーダ文献特にŚrauta文献の中から、*gandhá-*を主として、それを巡る神話的観念と祭式における具体的な様相を検討した。神話的「香り」として、Gandharvaたちが糧とする芳香があるが、それは牛乳や植物特にハスのものが主であり（→2.1）、樹木・樹脂も重要な位置を占める（→2.7）。また、彼らを追い払う役目を果たす草の香りもある（→2.4）。

また、悪臭の類いも*gandhá-*として言及される。獣の死臭が目立つが、それは犠牲獣の死臭であり（常に忌避とは限らない）、ほとんどが供物の香りとして言及されている（→2.2および2.5）。特にソーマの香りは神話的解釈を通じて象徴的な重要性を持たされている（→2.3）。

燻しと香りすなわち祭火の煙と香りの関係も無視できない。現代の線香の発祥として考えるには、Śrauta文献の用例だけでは少なく、より広範囲な調査が必要となる（→2.6）。燻しに糞の利用が見られることは注目に値しよう。

軟膏とその香り（明示は多くないが）は、「香」の儀礼史を解明する上で、塗香の原初形態の一つ（燻しや粉末の塗布もまた塗香である）としてキー・ポイントになり得ると予想する（→2.8および3）。何らかの香料を添加することは勿論だが、乳製品の香りが具体的な儀礼上の香りの原点であったかもしれない。

諸々の「香」は、その後Gṛhya-Sūtra文献やPitṛmedhaの儀礼規定等において一般化し、供養セットの如く*gandha*, *puṣpa*, *dhūpa*, *dīpa*…等と列挙されて

現れるようである。それらの調査は紙面の都合上機会を改めざるを得ないが、そこでは現代の儀礼的「香」に繋がる直接的な用例がさらに見込まれるであろう。

略号表

ĀpŚS=Āpastamba-Śrauta-Sūtra. Aśv.=Aśvamedho nāma pañcamo granthaḥ (in KS). AV=Atharva-Veda. AVP=Atharva-Veda-Saṃhitā, Paippalāda. AVŚ=Atharva-Veda-Saṃhitā, Śaunaka. BaudhŚS=Baudhyāyana-Śrauta-Sūtra. KātyŚS=Kātyāyana-Śrauta-Sūtra. KauśS=Kauśika-Sūtra. KS=Kāṭhaka-Saṃhitā. LāṭyŚS=Lāṭyāyana-Śrauta-Sūtra. MānŚS=Mānava-Śrauta-Sūtra. MS=Maitrāyaṇī Saṃhitā. PB=Pañcaviṃśa-Brāhmaṇa. ṚV=Ṛg-Veda Saṃhitā. TB=Taittirīya-Brāhmaṇa. TS=Taittirīya-Saṃhitā. ŚB=Śatapatha-Brāhmaṇa, Mādhyandina. VaitS=Vaitāna-Sūtra. VS=Vājasaneyi-Saṃhitā.

1） MS II 5,2:49,12: *vāyúr vā́ etásyāślīláṃ gandháṃ janátā anuvíharati yám abhiśáṁsanti*.「ヴァーユはこの［祭主の］粗悪な*gandhá-*を、［祭主に］呪いをかけている者たちに各々配分し［返す］のだ」。人は他者からの呪詛や悪口によって「悪臭」を付帯するという、象徴的な表現か。
2） 阪本（後藤）2016, p. 48f. 及び註 12 参照。また、本稿の全体的な見通しについて阪本（後藤）先生には貴重なご意見を頂戴した。ここに感謝申し上げる。
3） KauśS や VaitS はこの詩節を利用しない：Whitney 1905, p. 511 参照。このヴィラージ讃歌集では、このような同一視の表現が多様に繰り返される：AVŚ VIII 10,12; 22-29 を参照。
4） Whitney 1905, p. 661 参照。
5） =MS III 16,1:182,12; KS[Aśv.] V 6,4:177,12; TS IV 6,8,4; VS XXV 33.
6） *sukṛtā́*については Witzel, Gotō, Dōyama, Ježić 2007, p. 728 を参照。
7） Weber 1862, p. 256. つまり山羊の毛皮をまとっている（*vāsin-*）と解せるか。*bastavāsín-*の諸解釈については Whitney 1905, p. 496 参照。
8） VS XX 27. 行為については ĀpŚS X 24,5; KātyŚS XIX 1,21（ただし Sautrāmaṇī）.
9） VS は*sómam*とする。
10） KS XXVII 3:142,5-6.
11） AVP XII 7,2.
12） Winternitz 1909, p. 117: 1981, p. 124.
13） AVŚ VIII 6,10 も同様。
14） VS XXV 37; MS III 16,1:183,10; KS[Aśv.] V 6,5:178,3; TS IV 6,9,2.

15）Hoffmann 1967, p. 57:‘umkippen’しかしWitzel, Gotō, Dōyama, Ježić 2007, p. 728に従った。
16）Cf. VS XI 60, etc.
17）Mayrhofer, EWA Bd. II, p. 137.
18）Mayrhofer, EWA Bd. I, p. 488.
19）TS VI 2,8,4.参照。ただしTSでは*pū́tudru-*.
20）ソーマ祭でDīkṣā（潔斎）を行う祭主は、乳脂肪塊でつくる軟膏（*návanīta-*）を身体に塗る。神学的意義については大島 2011, p. 64ff.
21）KātyŚS XIX 4,14. 詳細は知られない。
22）Ranade 2006, p. 160f.
23）西村 2000, p. 3.
24）KauśS LXXI 20; LXXII 11では寝台を舟に見立てた何らかの儀礼に適用される。
25）＝VaitS XXXIV 9; KātyŚS XIII 3,21; ĀpŚS XXI 20,3; MānŚS VII 2,7,10.

参考文献

Myrhofer, Manfred. *Etymologisches Wörterbuch des Altindoarischen*, 2 Bde, Heidelberg: Carl Winter Universitätsverlag, 1986, 1996. [=EWA]

西村　直子.「Pāli聖典における乳加工関連の定型句について―Rājasūya祭のMitraとBrhaspatiに対する献供との比較」『文化』64 - 1/2（2000）、東北大学文学会、pp. 1-22.

Ōshima, Chisei. “*Dīkṣā́* in the Agniṣṭoma: Some Symbolic Aspects of the Sacrifier’s Role”, *Journal of Indological Studies*, Nos. 22&23 (2010-2011), Kyoto, pp. 61-85.

Ranade, H. G. *Illustrated Dictionary of Vedic Rituals*, New Delhi: Indira Gandhi National Centre for the Arts, 2006.

阪本（後藤）純子.「新月祭（および祖霊祭）の原初形態―Ṛgveda X 85とAtharvaveda Ⅷ 10を中心に―」『論集』43（2016）、東北大学、p. 286-260 (37-63).

Weber, Albrecht. *Indische Studien*, Fünfter Band, Berlin, 1862.

Winternitz, Moriz. *Geschichte der indischen Literatur*, Erster Band, Leipzig: C. F. Amelangs Verlag, 1909.

Winternitz, Moriz. *A History of Indian Literature*, vol. 1, trans. from original German by V. Srinivasa Sarma, Delhi: Motilal Banarsidass, 1981.

Whitney, William Dwight. *Atharva-Veda-Saṁhitā*, 2 vols., Cambridge, 1905.

Witzel, Michael und Gotō, Toshifumi unter Mitarbeit von Dōyama, Eijirō und Ježić,

Mislav. *Rig-veda Das heilige Wissen Erster und zweiter Liederkreis*, Verlag der Weltreligionen im Insel Verlag, 2007.

（東京大学大学院人文社会系研究科　死生学・応用倫理センター特任研究員）

SUMMARY

Smell in the Veda

Chisei Ōshima

This paper presents the investigation into the smell, odor, or fragrance in the Vedic literature. Central texts used in this article are Śrauta texts from Ṛgveda and Atharvaveda Saṁhitā to Brāhmanas and Śrauta-Sūtras.

A kind of incense or perfume has commonly been used in the tantric ritual and Buddhism, as seen at the present day. But we hardly observe such an item in the Vedic ritual. Therefore, I try to explore gandhá-, which is theologically explained and used as an item in the ritualistic contexts in the Veda, to find out the origin of the religious smell.

i) In the Myths, gandhá- is consumed by Gandharvas and mostly means a smell of milk and plants: lotus, pine, or resin. There is a case that a smell of a kind of grass is regarded as a talisman.

ii) Bad smell is also reffered to as gandhá-. Examples, in most cases, show the smell of carrion, which is emitted by a sacrificial animal, an oblation. The smell of Soma specially seems important in the Soma sacrifice.

iii) Fumigation, that is, fire with smoke is significant because it might be regarded as an origin of a stick of incense. it is noteworthy that horse dung is used as smoking chips.

iv) Ointment and its fragrance could be a key to understand the history of the ritualistic incense. It indicates that it is an origin of the incense application to a body of the sacrificer or those of priests, seen in modern religious rituals. Particularly, it is implied that the fragrance of dairy products may be, though it is not frequently indicated, the origin of the ritualistic incense. Gṛhya-Sūtras remain to be examined.